

レオン・ブロワの「ブルジェへの手紙」 について

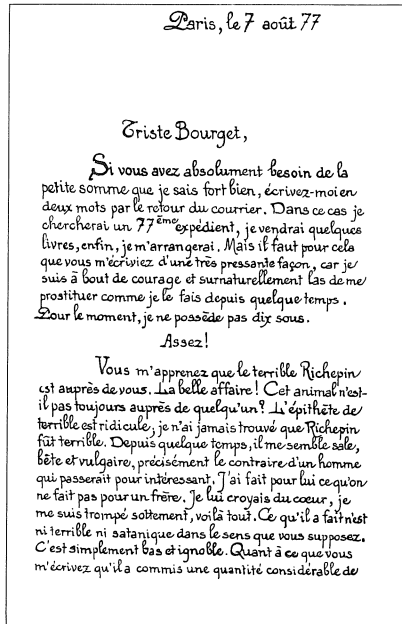
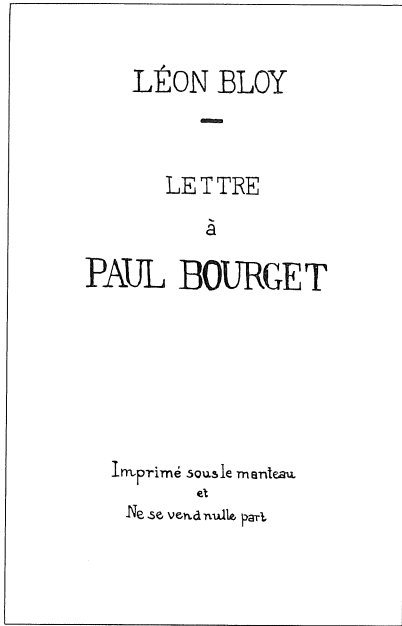
水 波 純 子

Léon Bloy (1846-1917) に、*Lettre à Paul Bourget* という小冊子がある。最近筆者は、我が国輸入業者を介して、パリ古書籍商よりこの小冊子を購入したので、それについて報告し、本冊子が含まれている問題について考察を加えたいと思う。

この小冊子は、ブロワ自身のみごとな筆蹟による、1877年8月7日付けの、Paul Bourget¹⁾宛の手紙の石版刷りである。くすんだ青色の表紙に、タイトルに一枚、本文5ページの小さな brochure である。タイトルには、LÉON BLOY/LETTRE /à/ PAUL BOURGET // Imprimé sous le manteau/ et / Ne se vend nulle part (私蔵版、非売品)とあり、奥付けはなく、またページも打たれていない。

古書カタログには、*Lettre à Paul Bourget*, Imprimé sous le manteau, 1929, 8p. Plaquette in-8, br. …… “E. O. autographiée, tirée à 200 ex. et non mise dans le commerce” とあり、この小冊子じしんには書き記されてないこと、つまり、ブロワの自筆のものであること、1929年の初版本、限定200部の1部であることが書かれていた。

この冊子の外観およびカタログの説明書きは、ブロワ歿後50年を記念してフランス国立図書館で行なわれたレオン・ブロワ回顧展出品目録中の、国立図書館蔵の一本についての説明²⁾とほとんど同じものである。さらにまた、A. -L. Lagerrière et J. Bollery 編のブロワ関係書誌 *Biblio-Iconographie de LEON BLOY* の記述 [57]/LETTRE A PAUR BOURGET. S. L. N. D. [1929].



IMPRIMÉ SOUS LE MANTEAU ET NE SE VEND NULLE PART. /
Edition originale. /1 plaq. in-8 sous couverture bleue muette, comprenant 1f. pour le titre, 5p. de texte et 1p. blanche. Texte manuscrit reproduit en Lithographie. /Tirage: 200 exempl. non numérotés, non mis dans le commerce³⁾ と完全に合致している。

手書き原稿石版刷りの初版本の実物と確信されるものを入手しえた喜びとともにほとんど同時に湧き起こってきたのが、なぜこのような手書き原稿が、私蔵版にせよ、印行されたのであろうか、という疑問であった。

プロワの書簡集は、*Lettre de Jeuness*⁴⁾をはじめ15冊が刊行され、また個別的に *Cahiers Léon Bloy*⁵⁾ のなかに掲載されているが、この *Lettre à Paul Bourget* のように、手書きの石版刷り、しかもただの一通の手紙より成る小冊子は、外に見当たらないように思われる。

また、この冊子の刊行年が1929年とあらば、ブロワの歿後に出版されたことになる。それでは、本文がブロワの自筆であるとしても、タイトル LÉON BLOY/LETTRE/à/PAUL BOURGET 以下もブロワの自筆であろうか、という疑問が残る。しかし、5ページにわたる本文が、かれ独特のものである美事な筆蹟で、一字の狂いも間違いもなく書き記されていることから、これはブロワ自身が印刷を意図して浄書したものであり、その目的に沿ってタイトルも自ら記したものであろうと推測されるのである。

1877年8月7日付けのブルジェあてのこの手紙は、ブロワの伝記作家 Joseph Bollery の *Léon Bloy*, tome 1⁶⁾ に収められている。しかし Bollery が掲載した手紙本文とこの小冊子のそれのあいだには、意味上はあまり変りはないが、多くの相異がみとめられる。小冊子の方では、改行にさいして一行アキとなっている他、実に27ヶ所ものヴァリエントがある。その内容を検討してみたい。

Bollery	brochure
10ヶ所：イタリックで書かれている。	特別な符号をつけず。
6ヶ所：, で切られている。	続けて。
1ヶ所：数字でなくかかかれている。 (soixante-dix-septième)	数字で。(77°)
1ヶ所：大文字で。(Eternité)	小文字で。(éternité)
1ヶ所：(la bêtise, la vulgaire bêtise et, quand)	一部削除がある。(la bêtise quand)

以上20ヶ所のヴァリエントに共通する特徴は、強意度が Bollery の方が高く、brochure の方が低いということである。

その逆に、小冊子の方で強意度が高いのは4ヶ所である。

Bollery	brochure
1ヶ所：続けて書かれている。	改行。
1ヶ所：(de très pressant façon)	不定冠詞を入れる。(d'une très pressant façon)

1ヶ所: ・(la Lâcheté.) ! (la Lâcheté!)

1ヶ所: 続けて書かれている。 , で切られている。

その他に、あまり意味または強意度が変わらないと思われるヴァリエントが3ヶ所ある。

Bollery

brochure

1ヶ所: (se nomme)

(s' appelle)

1ヶ所: イタリックで (*Sherry*=店の名)

特別な符号をつけず。(このばあい全文手書きのためであろう)

1ヶ所: (dites-vous)

me を加えている。
(me dites-vous.)

以上のことから推定されるのは、**Bollery** がもつじた手紙原文は、この小冊子ではなく、別のものであるということである。(これはブルジュにアてられた手紙であるから、第一の原物はブルジュの手許にあるべきであるが。) 次に、**Bollery** のほうが、おそらく手紙の原物により忠実であり、小冊子のほうは、手紙が書かれた時より後になって、多分小冊子の刊行年にあまり遠くない時に浄書されたものであろうということである。なぜなら、**Bollery** で、いたるところにちりばめられていたイタリック体の部分のほとんどが **brochure** では特別の強調が与えられず書かれている。その他先にあげた計20ヶ所のヴァリエントは、執筆当時の過度の興奮を鎮静化するための操作であるように思われる。しかし他方、少数の箇所においては、強調すべき点を更に強調するという配慮が加えられ、全体的統一をはかって、文学的完成度を高めようとする意図がみられるからである。

ブロワは後年になって、若き日の自らの手紙を、印刷の意図をもって浄書したのだと思われる。「売るためでなく。」それでは何のために、どうしてこの手紙を選んで浄書したのだろうか？

この疑問を一応おいて、手紙本文を邦訳紹介しておきたい。その際、この手紙を、伝記的資料としてよりも、ブロワの作品の一つとしてとり扱いたい筆者の観点からして、ブロワが自らの意志で改めたと思われる小冊子のテキストの

方に依りたいと思う。またページ付けがないため、本稿の終りの部分での引用の便のために、各パラグラフに（a）（b）……の語を付すことにする。

77年8月7日パリにて

あわれなブルジェよ

小金が絶対に必要なばあいには——よくあることだ——折り返し一言書いてくれ。僕は77番目の金策を試み、数冊の本を売り、結局、都合をつけよう。しかしそれには、大至急で手紙をくれなくてはいけない。なぜなら、僕はすっかり元気がなくなっているから。少しまえから自分を売っているが^{プロステイテユエ}、それには超自然的に言うてうんざりしてきたからだ。いまのところ10スーもない。（a）

もう沢山だ！（b）

恐ろしいリシュパン⁸⁾が側にいる、と君は言っている。そんな事か！ あいつはいつも誰かの側にいるんじゃないのか？ 恐ろしいという形容詞は滑稽だ。僕はリシュパンを恐ろしいと思ったことは一度もない。あいつは、汚ない、いやらしい俗物だ。面白い人間の正反対だ。少しまえから僕はそう思っている。兄弟にたいしてもしないことをかれにしてやった。かれには心があると思っていた。ところがとんでもない間違いだった、というわけだ⁹⁾。かれの行為は、君が考えるようなみでは、恐ろしいことでも、悪魔的なことでもない。ただ低級で卑劣なだけだ。かれは瀆聖の言葉を吐きながら雷に打たれていないと君は書いている。しかしこれもまたひどく低級なことだ。リシュパンを、雷が絶対落ちっこない強力な避雷針とするわけだが、僕の頭にひとりで浮んでくるのは、神に挑戦するために、エルサレムの神殿を再建すべく有力者たちに働きかけたときの、ヴォルテールのあの滑稽な熱中ぶり¹⁰⁾だ。ユダヤ教は神殿によって形を与えられるだろうが、建物を再建するのと同じくらいの手軽さでそれを復活させられるものと考えたらしい。寄木細工の宗教が蘇生しないことは、

信仰と理性によって証明されている。一人のプリンスが、エルサレムで石の上に石を重ねたいと思うたびに、アミアン・マルスランが語ったことがくり返されたとは、信じられない。(c)

冒瀆の言葉の下には泥の底があり、それは愚鈍と呼ばれる。そこに降りると、いかに強い人間も愚鈍に出逢わざるをえない。しかしまた第二の底がある。これは最終的なもので、そこから下には降りられない。その底は糞でできており、卑劣と呼ばれるものだ。小さな危険もしくは起こりそうにない危険のみに挑む男はみな、たしかに卑劣な男だ。かれを棒で打ったり、首を足蹴にしたり、ふつう卑怯者が受けてしかるべきことをすべてを行なっても、差し支えないと思う。リシュパンには全くわかるまい。あやうく口を叩かれそうになっていたことが。シェリイ¹¹⁾で、君のまえで——君が面白がったもんだから——可愛そうな子供に、尻を出せとかれが言いつけたあの晩、あの子の初聖体の日の晩に。がもうこんな卑猥な話は止めにしよう。(d)

君に興呼深い手紙を期待していたのだが君は滑稽な手紙をよこした。カトリシズムから離れもしないし近づきもしない、と君は言う。このチンプンカンプンは一体何かね？ こう書いたとき君は酔っぱらってたんだらう。カトリシズムか自分か、そのどちらかは存在しない、と言おうとしたのかね？ 気狂いでなければ、それ以外の解釈をみとめることは出来ないだろう。僕の^か^た^く^な^さの覆いを打ち破るのは大変だろうと、君はつけ加えている。安心したまえ。あきらめたよ。それが不可能だと思うからではなく、ただ、事をいとも簡単にする肉体的行動手段をもたないからだ。物質的手段によって魂に働きかけるのは簡単だと、僕は深く信じている。神を信じない者も、改宗するまで公衆のまえで毎日むち打たれるということがはっきりわかっているときには、大声で信仰を呼び求めるだろう。そして神はやがてかれにそれを送るだろう。こんなことを書くとは情ない、と君は思うだろうね。しかし好きなだけ肩をすくめるがよい。その傲慢な肩のために神は鞭とあめを増やしているが、君がその肩をどんなにそびやかしても、僕が人間性の真実の中にいることを認めざるをえないだ

ろう。善意は棍棒のもとでしか決して開花しなかった。だから、福音書のなかで、平和が善意の人びとに約束されているのだ。君たちはこういうふうには思わない。自分の魂は自由だ、自分は賢い、と思いついでいるから。ところが君は、自分の欲望の奴隷という、汚ない下水溜のなかでもがいているのだ。(e)

人生は永遠に続く片手間仕事さ、と君はさらに言っている。片手間仕事とはなにか、僕にはまったくわからない。人生は、求めるものを人間に与えはしない、と言おうとしているのなら、君は、当然のことか、もしくは恐ろしく馬鹿げたことを言おうとしたのだ。この世の虚しさについての幼稚なきまり文句をはっきり受け入れても、依然として次のことは確かである。つまり、人生は、人が人生に求めねばならぬものをたっぷり与えてくれる。それは苦惱であり、これがすべてなのだ。(f)

続けて言おう。君はラマルチーナを読み、断然、今世紀最大の詩人だ、と宣言している。この断然ということばは、ラマルチーナの詩のなかではすでに許しがたい埋め草だ。そしてブルジェ、君の安っぽい散文のなかでは、霧に汚れたガラス窓のうえのはえの糞だ。君の手紙のなかはひどく暗いからな。だから君は、ラマルチーナより低級なただの四行で、人生のすばらしい宿命のことを語っている。教義の、一切の教義の不幸は、取りかえしのつかぬものであり、永遠のものであるところの、事実のあとから生れたことにある、と君は言う。(それは信じられていることの正反対だ) 取り返しがつかない！ 君は取り消しえない、と言いたかったんだろう、ブルジェ先生。こんなつまらない話を書き送って自分のことを寛大だとも思っているのかね？ しかしブルジェよ、僕は君に手紙を書くときには、すべてのものが絶対に語ったことのないこと——それはある程度興味深いことだ——を書こうと努めている。ところが君の手紙は、これで全部だ。リシュパンの側にいるため、君もかれ同様の馬鹿になりそうになっている。僕は全力でそれを阻止しよう。君を打つ力がないから、君を誹謗するという不可侵の権利を行使しよう。(g)

そのことで、君は好きなだけ文学のなかに逃げ込むがいい。このまたはあの淫売屋のなかに君のあとを追って行きはしないから。他に方法があるときには。エデル¹²⁾にはうんざりだ。リシュパンはうんざりだ。バルザックはうんざりだ。ミケランジェロも面白くない。僕は、神のためにつくられていないすべてを、人間の注目に値しないものとみなしている。君やドールビリィ¹³⁾氏が、美の追求はすべて神の追求であり天の発見である、などとつまらぬ詭弁を陋さぬように、僕は自分の考えを、次のようなポピリウスの環¹⁴⁾のなかに閉じこめよう。——いと聖なる処女の愛のためにつくられていないすべては、悪である。(h)

僕たちはエデルから遠くにいるが、原稿を預けてくれれば、喜んで写しをとろう。しかし急ぐほうがいい。僕がまだ君を憎まないうちに、僕を利用するがいい。僕は軽蔑しながらコピーするだろう。崇高な洗濯の伝票をコピーするように。(i)

この手紙をリシュパンに見せてくれ給え。(j)

君を軽蔑しそうになっている

レオン・ブロワ (k)

以上が全文の翻訳であるが、この手紙がブロワ自身のうちでもつ重要性、またその内容の真の意味を知るために、この手紙が書かれた背景について簡単にのべてみたいと思う¹⁵⁾。

ブロワとブルジェが始めて出逢ったのは、1876年2月ごろとされている。ブロワは30才、ブルジェは6才年下であった。

カトリックに改宗したブロワは、バルベイ・ドールビリィの許で作家としての修行をつみながら、*l'Univers* 誌その他の新聞に、宗教的信念にもとづく過激な批評論文を寄稿しはじめていた。

一方ブルジェは、Louis-Legrand 校を卒業した秀才であったが、教職への

道を好まず、文学的ボヘミアンの群に身を投じていた。この手紙にも出てくるピヤホール Sherry-Cobbler は、かれらのたまり場の一つで、ここで J. リシュパン、Paoul Pouchon, Maurice Boucher そして P. ブルジェが Vivants のグループをつくり活動していた。ブルジェは Copée 流の初期詩集 *La vie inquiète, Edel* を書いたのち、スタンダールとバルザックを研究しつつ、現代社会の心理学者となるべく努めていた。

この Sherry で、ブロワはブルジェとリシュパンに出逢い、すぐに三人のあいだに親密な友情が生れた。Bollery はその著に1876年から77年にかけてのブルジェあてのブロワの7通の手紙をのせているが、それを読むと、ブロワがブルジェに抱いた感情の *évolution* をはっきり知ることができる。

ブロワはその手紙に書いている。「君の魂は最初の日から僕の関心をひいた… …僕は君の魂を、君の文学の光輝やく格子ごしに眺めた。木影で眠るこの野獣、ひじょうに恐るべきもの、悪魔的なものになりうるこの野獣を眺めた。」⁶⁾ かれは、自分が自分とは異質的な人間を愛するという奇蹟を感じた。そうして、ブルジェに限りない賛美と憐憫を示している。この賛美とは何か？ ブロワにあっては、それはブルジェの才能そのものに向けられたものではなく、かれの詩人としての魂に向けられていた。しかしラマルチーナ、ミュッセ流のロマンチックな詩に養なわれているこの魂は、もしキリスト教により強められないならば、通俗的な、悪魔的なものとなるであろう。こういう危険に直面しながら、ブルジェが、不安と懷疑主義の詩人になろうとしているのを見ると、憐れに思う、とのべている。また別の手紙⁷⁾では、自分の改宗の道程を、卒直に、詳細に語りつつ、神を信ずるように熱心にはげまし、「ブルジェよ、男となれ。君のすばらしい才能をはずかしめるな。君は大きな危険のなかにある」⁸⁾ と叫んでいる。

ブロワのブルジェへの態度は、始めから年長者のそれであった。4月12日付の手紙で、かれはこう書いている。

「僕は君の年長者だ。何年か早く生れているし、とりわけ、大きな苦しみのせいで年上なのだ。この苦しみの大部分は僕しか知らないもので、責任は僕だ

けにある。……だから僕は大きな顔をして話す権利がある。あらゆる意味で真の子供である君にたいして。』¹⁹⁾

自分の説教者めいた態度への弁解にはしなくも 洩れたこのなぞめいた表現は、実は、1877年2月、ブルジェと識り合ったほとんど同じころから始まった、Anne-Marie Roulé との関係を示しているのである。Anne はパリの街娼であった。ブロワはかの女の風変りな様子にひかれてその客となり、それから不可抗的な力にひかれてかの女の部屋に出入するようになった。このような行為は、墮落した現代社会に鋭い攻撃を加えてきたポレミスト・ブロワにまったく適しからざるものであり、良心の苛責は、かれを狂気じみた苦悩のうちに投げ込んでいる。かれは恥づべきこの関係を、友人たちにひたかくしにしていた。

かれは苦悩と祈りと涙のすえ、6月末 Anne を Notre-Dame des Victoires 教会に伴って、共に罪を告白し、司祭のすすめに従って、関係を断つことを決心した。かれは Anne の借金を払ってやり、かの女はいかがわしい職業をすててお針女になった。しかし Saint-Germain 大通りのベンチでしか逢わぬという約束は何度か破られ、ブロワは、司祭のすすめるようにこの娼婦と結婚する意志もなく、罪の泥沼のなかでもがいていた。

ブルジェあての手紙のなかでかれは、「僕は孤独だ。とても悲しい。……僕の意識の内奥には、絶望の力と結合した4つの要素、火と、血と、風と、泥がある」²⁰⁾ といっているが、それは、ブロワがとり囲まれていた悪魔的な力の認識を意味しているのである。

Steinmann は、ブロワのこの内的葛藤が、リシュパンとブルジェへの熱心な改宗勧告と期を一にしていることを指摘し、それをブロワの性格の風変りな要素の一つとして示しているように思われる。しかし罪の深淵のなかで、自己のアイデンティティを光の方に求めながら、より激しく神の恵みを請い願うのも人間の本性であろう。袋小路のなかで、神を求める心が友人にたいする熱心な改宗のすすめにそのはげ口を見出したとしても、不思議はないように思われる。「僕は君のもとにキリストを送ろう」²¹⁾ という力強い叫びは、光と闇の両極にひき裂かれた苦悩の深みから生れている。

しかしこの改宗の熱心なすすめは実を結ばなかった。後年ブロワは、*Dernière Colonne de l'Eglise* (1903) で述べているが、ブロワはリシュパンにかんしては成功した。かれを Saint-Sulpice 教会に伴い、秘蹟をうけさせることができた。ところがしばらくして、かれが受けた秘蹟のことを嘲けて語っていることを知った。ブロワの怒りは極地に達し、リシュパンに悪罵のかぎりを投げつける。「恥づべき悪党、いやらしい極悪人……君の魂は売淫の悪霊が好む娼婦だ……」²²⁾

一方ブルジェのほうは、Saint-Sulpice に行きはしたが、かれをはじめから petit cochon として扱った司祭の不手際にたじたじとなって、逃げ出した。

1877年8月、ブルジェはリシュパンとともに、Moret で別荘ぐらしをしていた。Anne-Marie との関係を打開すべく、トラピストカシャルトルーズで黙想をしようとして企てたブロワは、ブルジェに200フランの借金を申込む。8月6日付でブルジェが送った返信にたいして、翌7日に書かれた返事が、問題にしている「ブルジェへの手紙」である。

前に提出した疑問に立ちかえり、この手紙の価値を知るべく、分析をこころみてみよう。

8月6日付のブルジェの手紙は、以前貸した金を返してくれという催促から始められている。ブルジェの吝嗇にブロワは怒った。un 77^e expédient (a) (77番目の金策) という誇張法がそれを示している。

以下、ブルジェが手紙に書いた主なことがらの一つ一つをとりあげながら、ブロワは3倍の量におよぶ返信をしたためている。

ブルジェは言う。le terrible Richepin………a commis une quantité considérable de sacrilèges en paroles sans être foudroyé. (恐ろしいリシュパンは、雷に打たれもせず、沢山の冒瀆の言葉を吐いている。)(c) しかしそれは、ブルジェ自身の考えではないだろう。なぜならかれはそのすぐ後で、ブロワのすすめるカトリジズムに対しては中立的な立場をとることを宣言しているからである。つまり引用したこの文章は、ブロワの怒りから自分の身をあら

はじめ防衛する意図をも含ませたところの、自分ではなくブロワの立場に立って選んだところの、気の利いた表現のつもりなのである。

terrible (恐るべき) とは何か、とブロワは言う。神に向って吐かれる冒瀆の言葉は、第一に vaseux (泥の) 底、つまり bêtise (愚かさ) (d) をもっており、最終的には merde (糞) である。つまり人間の Lâcheté (卑劣さ) に由来するものである。リシュパンは、terrible であるのではなく、たんに bas (低俗) であり、ignoble (卑劣) (c) であるにすぎない。ブロワはリシュパンに、さらに汚ない言葉を弾丸のように吐びかける。bête (馬鹿)、vulgaire (低劣)、sale (汚ない)、animal (動物) (c) と。

リシュパンはまた避雷針にたとえられる。ブロワは、ブルジェに向って言う。リシュパンは雷に打たれもせず冒瀆の言葉を吐いていると君は言っているが、それではリシュパンは paratonnerre (c) と言うことになる、と。この比喻による誹謗の滑稽味は、Voltaire の「愚拳」になぞらえられ、さらに拡大、増幅されてゆく。

ブルジェは、リシュパンほどには手厳しく扱かわれてはいない。ブロワは、triste Bourget (あわれなブルジェ)(a) また皮肉をこめて monsieur le Professeur (ブルジェ先生)(g) と呼びかける。以前の手紙では mon cher Bourget, mon cher ami, mon cher ami Bourget あるいは単的に Bourget と親しみぶかく呼びかけていたのに²³⁾。(しかしリシュパンあての手紙のなかで、ブルジェが Saint-Sulpice から逃げ出したことを嘆いたときには、ブルジェのことを lâche Bourget, infâme Bourget とののしっていたのだ。²⁴⁾)

「カトリシズムから離れもしないし近づきもしない」(e) とブルジェは言っている。しかしそれは、絶対か無か、神か悪魔かという二律背反の世界に生きるブロワにとっては、ありえないことである。それは、「カトリシズムか君か、そのどちらかは存在しない」(e) と言うことになる、という結論をブロワに導き出させるであろう。人生を éternel à-côté (永遠に続く片手間仕事) (f) だと考えるディレッタントのブルジェにとっては、décidément (断然)(g) という言葉そのものが、場ちがいな、余計なものであり、un vitre sale par un

temps de brouillard (霧に汚れたガラス窓) のようなブルジェの手紙のうえの, chiure de mouche (はえの糞)(g) であろう。Vous barbottez dans le plus immonde cloaque de l' asservissement de tous vos appetits. (君は, 自分の欲望の奴隷という汚ない下水溜のなかでもがいている)(e) とブロワは言う。

こうした誹謗の言葉は, またより親しい表現の隣におかれて, 皮肉によってその効果を高める。très vile prose de mon ami Bourget (僕の友ブルジェの安っぽい散文)(g)。ブルジェの詩集 *Edel* は, sublime note de blanchissage (洗濯屋の崇高な伝票)(j) と言われるが, これは, note (調子, 伝票) の多義性を利用した, antiphrase のもっとも成功した一例であろう。

こうしてブロワは, リシュパンとブルジェにたいして, 様々のニュアンスをもった誹謗の数々を投げつつ, 自分自身の考えをはっきり打ち出してゆく。苦悩こそ, 一切の精神的価値を生み出す源であり, 人間は人生にたいして, 苦悩を求めなければならぬ(f) という, 「苦悩の神秘主義者」(Albert Béguin) ブロワの姿は, ここでもうすではっきり現われている。そしていまのばあい, この苦悩は, Anne-Marie との関係のなかに在った。*Edel m'ennuie, Richepin m'innuie, Balzac m'ennuie*…… (エデルにはうんざりだ, リシュパンにはうんざりだ, バルザックはうんざりだ……)(h) 繰り返されたリズムがあらわすかれの心の苛立ちは, この苦悩のなかから出てきたものであるに違いない。だからこそかれは自らを, Popilius の環の中に閉じこめたいと書いているのだ。それは, 「いと聖なる処女の愛のためにつくられていないすべては, 悪である」(h) というスローガンである。それは, ブロワが神から与えられた厳しい命令であるとともに, ブルジェへ, またかれを通じて人類全体に向けられたものであることを感じさせる, 力強い調子を帯びている。

ブロワの初期の批評論文を読んでもみると, 批評の対象の細部にあまりにもこだわったり, 独断的な評価に終止し, また現在ではその真意がつかめなくなっているものがある。そのなかにあつてこのブルジェへの手紙は, まったく個別的な事情のもとに書かれながら, ブロワが養いつつあつたパンフレット作家と

してのテクニックをいかに発揮しつつ、ことがらを普遍的な場に、絶対の高みへと導き入れることに成功している。ブロワの特色であり、欠点ともされた諷刺と悪罵の強烈さは、このばあい、外と同時にかれ自身の内部に向けられたものであったために、より抑制され、力を内包したものになっている。

ブルジュエはその後栄光の道をたどりブロワと疎遠になった。1902年カトリックに改宗したが、それでも二人は相逢うことがなかった。ブロワはあまりにも厳しい「絶対への巡礼」²⁵⁾の道をたどっていたからである。

この「絶対への巡礼」の道は、晩年においてかれを光で充たす祈りと冥想の道であったが、それは同時に、神の正義を求め、背教的な社会とその悪徳にたいして戦う攻撃と誹謗の道であった。「絶対においては、正義と愛は同一のもので、同質のものであ」²⁶⁾り、「愛とは怒号することであり、真の愛は苛責ないのであるはずだ」²⁷⁾とかれは考えていた。かれにとって文学は人生の目的ではなく、神の国をもたらしべき道具、剣である。

何よりも兵士 *homme de guerre* として自己規定したブロワにとって、この(遠い日の)手紙のなかの、激しさと豊けさを同時にもつパンフレット作家としての自らの姿は好ましいものであったにちがいない。そこには、ブルジュエとの交友の思い出が、また、かれを神秘主義に導いた女性 *Anne-Marie* との苦しみにみちた思い出が混っていたかもしれない。そして何にもまして、ブロワはこの手紙の作品としての価値を十分に意識し、貴重なものに思っていたのではないだろうか？ それゆえにこそ、かれはこの手紙を浄書して印刷することを考え、多くの箇所小さなヴァリエーションを加えることによって、個人的な怒りやうらみの印象をうすめて、諷刺的作品としてのより高い次元に形象化しようとしたのではないだろうか？

注

- 1) Paul Bourget (1852~1935)。フランスの作家。詩 (*Au Bord de la mer, la Vie inquiète, Edel, Aveux*) 批評 (*Essais de psychologie contemporaine*)、小説 (*Cruelle Enigme, Un crime d'amour, André Cornélis, Mensonges, le Disciple*) の、心理主義、唯物論、カトリシズム他多くの影響を次々にうけた多様な作品がある。始めブロワの友であったが間もなく不和になる。

- 2) “39. LEON BLOY, LETTRE A PAUL BOURGET. Imprimé sous le manteau et ne se vend nulle part. Paris, 7. août 1877. Copie autographiée. — B.N., Impr., Rés. 8° Ln²⁷. 70654” とある。Bibliothèque Nationale: LÉON BLOY, Paris, 1968, p. 7.
- 3) Paris, La Connaissance, 1935, p. 48.
- 4) Edouard Joseph, 1920.
- 5) La Rochelle, 1924~1952. réimprimées de Slatkine, 3 vols., 1973.
- 6) Albin Michel, 1947.
- 7) 1874年くらい批評家として活動していたが、それがかれには売文業として受取られるようになっていたことを示す。
- 8) Jean Richepin (1849~1926) 小説家, 詩人. *Chanson des gueux*, *Les Caresses*, *La Glu*, *les Blasphèmes*, *la Mer* 等の作品あり。
- 9) ブロワはリシュパンを改宗させようとして心を砕き, ついに Saint-Sulpice 教会で秘蹟をうけさせた。がその後リシュパンはこのことを嘲けて人に語っていることを知って, ブロワが怒ったことを指す。
- 10) アミアン・マルスランの話とともに, 不明。
- 11) Scherry-Cobbler. 当時作家たちが出入りしていたパリのピヤホール。ここでブロワは, ブルジュとリシュパンを識った。
- 12) *Edel*, 1878. ブルジュの初期詩集。
- 13) Barbey d'Aureville (1808~1889) *Les Diaboliques* 他多くの作品をもつ小説家。ブロワの師。
- 14) Popilius (BC 173~158) ローマの執政官。元老院により, シリアの王アンチオクス・エピファニのもとに送られたとき, 王のまわりに環を書いて速断を迫った。以来, ポピリウスの環の中に人を閉じこめるとは, 逃れられない状況に人を置くことを意味する。
- 15) 以下 Bollery; *ibid.*, Jean Steinmann; *Léon Bloy*, Cerf, 1955, P.J. Pijis; *La Satire littéraire dans l'œuvre de Léon Bloy*, universitaire pres Leiden, 1959, に依った。
- 16) Bollery, *ibid.*, p. 232.
- 17) *op. cit.*, p. 227~230.
- 18) *op. cit.*, p. 234.
- 19) *op. cit.*, p. 232.
- 20) *op. cit.*, p. 227.
- 21) *op. cit.*, p. 232.
- 22) *op. cit.*, p. 243.
- 23) *op. cit.*, pp. 226~239.
- 24) *op. cit.*, p. 240.
- 25) Bloy; *le Pèlerin de l'Absolu*, Journal de Léon Bloy, tome III, Mercure de France, 1963.
- 26) Bloy; *le Désespéré*, Oeuvres de Léon Bloy, tome III, Mercure de France, 1964, p. 224.
- 27) *op. cit.*, p. 225.